

1. 活動先

特定非営利活動法人 「菜の花の家～成岩」

2. 活動先の概要

菜の花は、物忘れがあっても、障がいがあっても、子どもからお年寄りまで、住み慣れた地域の中で生き生きと暮らせる街づくりを目指して、平成13年に民家改修型のデイサービスを開設した。デイサービスを運営していく中で、心の病の若者達との出会いや交流を通して、徐々に彼らが生き生きと輝いていく場面に出会った。平成16年度愛知県のNPO提案型モデル協働事業で市民フォーラム・愛知県・障がい者と一緒にワークショップを行い、更には、17年度のWAM助成事業で障がい者の社会参加をテーマに、「共生型ケアワーキング支援事業」に取り組む中で、ニートや心の病のある若者を支援するNPO法人 toピアと交流を深めてきた。そういった経過の中で、平成18年度より、認知高齢者の支援強化として、小規模多機能型居宅介護が打ち出され、高齢者と障がい者の若者達の交流や就労場所や地域コミュニティスペースとしての役割が非常に強いと感じ、2団体協働の基に19年3月末に菜の花の家～成岩を開設した。

また、菜の花の家～成岩の理念は、「年をとっても、障がいがあっても、誰もが地域の中で、安心して自分らしい暮らしを続けていくことを目指す」である。

そして、現在の定員は20名である。そのうちの、通っている人数は12名、宿泊は4名、1日のスタッフの数は約5名である。

主に、サービス内容は3つある。1つめは、訪問サービスで自宅に訪問して食事などの日常生活支援や安否の確認を行う。2つめは、通いサービスである。デイサービスとして1日を過ごす。3つめは、宿泊サービスである。個室で必要に応じて宿泊をする。提供時間は、訪問サービスが2時間で、通いサービスが午前9時から午後4時である。また、宿泊サービスについては、午後8時30分から午前8時30分である。これらのサービスをまとめ、小規模多機能型居宅介護となっている。小規模多機能型居宅介護は、24時間・365日対応していて、訪問・通い・宿泊サービスを行っている。そして、利用者主体で動いている。利用金額は、1ヶ月ごとの定額制、要支援1～2、要介護度1～5で金額が分類される。

3. SL活動プログラム

私たちは、認知症のお年寄りを対象としたレクリエーションを考えた。また、菜の花の家～成岩には片まひの身体障害がある利用者さんもいたので、利用者の方主体でプランニングを行った。

まず、1日目から説明する。1日目は、自己紹介や体操、講師の方を招いて行った音楽療法、カレンダー作りをした。1日目は、一人ひとりの利用者の方を理解するため

にたくさんの交流の場を設けていただいた。この日は、コミュニケーション中心であった。

2 日目は、体操や講師の方を招いた音楽療法を行った。そして、私たち主催でにらめっこ大会を行った。にらめっこ大会の目的は顔の運動をし、みんなで笑いあうことである。その効果は心を元気にすることである。実際には、みんなで円になり、1 対みんなでその 1 人の人を笑わせた。みんな楽しそうに笑っていて、成功に終わった。

3 日目は、体操やうた、ちぎり絵、ぬりえを行った。この日は私たちが計画した、ちぎり絵とぬりえを行った。ちぎり絵は、ちぎる人と貼る人にわかれてみんなで分担して行ったが、サイズが大きすぎることや、そのせいでちぎり絵と一緒にやってくれる人と飽きてしまう人がいてなかなか進まなかった。片マヒの方とどのようにちぎり絵をやろうかと考えたが、のりを私たちが塗れば貼ることはできるため、そのようにしてちぎり絵と一緒にやることができた。そして、利用者の方についてもわかってきて、うまく私たちからも進んで話しかけることができるようになってきた。

4 日目は、体操やうた、ちぎり絵を行い、昼食にはみんなでお好み焼き作った。ちぎり絵は 3 日目と同じようになってしまおうと思い、参加への促進を行ったが、利用者の方のペースがあることがわかり、強要はしないことにした。お好み焼きを作る際は、火傷には気をつけて、食べる量も考えた。また、利用者の方が食べやすいように小さいお好み焼きを作ることが注意点であった。そして、このように利用者の方を思いやることが大切だと感じた。

5 日目は、体操やちぎり絵、おりがみを行った。おりがみを行う際に、片マヒの方にもどのように参加してもらおうか考えたが、私たちが少し手伝いするだけで一緒に折り紙をすることができた。利用者の方もみんなおりがみを楽しくやることができた。おりがみをやる際に教えてくれた方は、菜の花のスタッフさんで、うまくみんなの参加を促すことがとてもうまくいったため、明日の私たちが主催するどら焼きパーティーに生かそうと思った。

6 日目は、体操やどら焼きパーティー、うた、ちぎり絵を行った。朝からどら焼きの生地作りをして、利用者の方に生地を混ぜてもらおうなど一緒にやるということを重視してやることができた。あんこは火を使わなくてはできないものを買ってきてしまったため一緒につくることができず、そこが反省点である。そして、焼く際は火傷と焼くサイズに気をつけて、スタッフの方と協力して焼くことができた。最終日ということで別れの挨拶をしたときに利用者の方で涙を流して私たちとの別れを悲しく思ってくださった方がいた。短い 6 日間であったが、1 日の大半を共にすごしていたことで少し絆が生まれたのではと感じた。

4. 活動のふりかえり

はじめに、活動を通じて感じたこと・気づいたことを菜の花の家～成岩についてと

私たち自身について分類して述べる。次に、活動を通じて学んだことを明確にし、最後にこれから深めていきたいことを学習面と生活面に分けて示す。

まず、活動を通じて感じたこと・気づいたことを述べる。菜の花の家～成岩は、スタッフさんが利用者の方にレクリエーションや入浴を強要していなくて、まったく焦らないところが利用者の方にとって居心地のよい場所になっていることがわかった。だからこそ、利用者の方が自分らしく過ごせているのだなと感じた。また、利用者の方主体でスタッフさんが動いていて、スタッフさんの細かい気配りや思いやりがあることに気づいた。さらに、スタッフさんが利用者の方ひとり一人を理解し、把握していることがわかった。そして、スタッフさんの「ありがとう」という言葉がとても目立った。その「ありがとう」という言葉にも利用者の方は笑顔で答えていて、「ありがとう」という一言がいい雰囲気作りにもなっているのだと感じた。また、レクリエーションを一緒にやってくれる人もいればやってくれない人もいて、みんなが楽しまなくては意味がないため、やってくれない人に対してどのように対応するかがとても難しかったと感じた。

私たち自身については、今回の活動で自分自身の知らない性格を知り得ることができたと感じている。活動1・2日目などは緊張して消極的になってしまって、利用者の方とうまくコミュニケーションがとれなかった。このことから、私たちは初対面の人と接するときは消極的になってしまうことや、すこし自分の中で壁を作ってしまうことがわかった。

次に、活動を通じて学んだことを明確にする。6日間という長いようで短い期間でやれることはとても限られてくるのに、計画を立てているときやりたいことをたくさん考えて、尚且つそんなに難しくないと考えたつもりでも、こなす事がすべてできず、利用者の方に合わせる事がなにより大切だとわかった。そして、授業で学ぶ知識はとても大切なことだが、それを実践にうつすことの難しさを学んだ。また、私たちは利用者の方とコミュニケーションをとって相手を理解するために、利用者の方の昔の話や懐かしい話を聞いていた。これは、認知症の高齢者の方とコミュニケーションをとるとき、昔の話や思い出すような話をするとよいという学習から、私たちはこのようなコミュニケーション方法をとったのである。しかし、なかには帰宅願望が出てきた方もいて戸惑ったことがあった。そのときは、スタッフさんに対応してもらえたが、実際に私だけだったら対応できなかったと思う。このことから、私は、利用者の方のことを自分で知ろうとすることも大切だけど、他の人（スタッフさんなど）から事前に情報を聞くことも大切だと学んだ。自分から行動は難しいがスタッフさんの指示を待つのではなく分からないことは積極的に恥ずかしくなく聞くことが向上の第一歩だと気づいた。

最後に、これから深めていきたいことを示す。私たちは高齢者の分野に興味があるので、認知症を含めたいろいろな高齢者の方とのコミュニケーション方法を深めてい

きたい。菜の花では、認知症の高齢者の方と触れ合う機会を与えてもらった。だから、これからはこの経験を生かし認知症について学び、活動などで足りなかった部分もこれからの学習で補っていききたい。そして、私たちは菜の花のメリットしか見れず、デメリットを見ることができなかった。探そうと思っても見つけ出すこともできなかった。原因はほかの NPO を知らないため、どんなところが問題点でどのように改善すればさらによくなるか比較ができなかったことにあると思う。そのためみんなの活動先についての発表を聞き、たくさんの NPO を見て知り、菜の花の家～成岩やほかの NPO についての知識や活動内容について深めていききたい。そして自らメリット、デメリット、改善点を見つけ出せるようになりたい。

また、このような活動やボランティア、実習などには“初対面”という難関がつき物だと思う。しかし、利用者さんとの仲を深め、またはお互いの理解も深めるために、自分から壁を作って消極的にならないことや人一倍積極的に行動するという意識を持って行動したい。

5. おわりに

はじめは、とても緊張してしまい迷惑をかけたこともありました。しかし、菜の花の家～成岩のスタッフさんや利用者の方の優しい対応でリラックスして、とても充実した学びができたと感じています。6 日間という短い時間でしたが、私たちにたくさんのことを教えていただきありがとうございました。この経験を生かして、もっと勉強に励みたいと思います。本当にありがとうございました。

1. 活動先

特定非営利活動法人 「地域福祉サポートちた」

2. メンバー

河合 賢 松田拓也

3. 地域福祉サポートちたの概要

■サポートちた設立経緯

1990年に愛知県東海市で在宅サービス団体である東海市在宅介護ふれ愛が活動を始めて以来、知多半島では市民互助型在宅福祉活動が活発化した。団体間で情報交流が盛んになり、1998年5月にサポートちたの母体となる「ちた在宅ネット」が誕生する。

その後、1998年のNPO法施行や2000年の介護保険制度導入をきっかけとして各団体が組織化・事業化をさらに進めることとなり、ネットワーク組織として1999年8月に「地域福祉サポートちた」設立、同年12月にNPO法人を取得。現在10名のスタッフで運営されている。

■知多市市民活動センター

知多市市民活動センターは、市民活動の支援機能を持つ組織、団体が拠点を置き、市民活動に関する学習からボランティアやNPO活動の推進まで、さまざまな活動を応援する市民活動の総合拠点。地域福祉サポートちたは、知多市市民活動センターに拠点を置き、運営委託している。

■事業内容

知多半島は、福祉系NPOのネットワークがゆるやかに形成され、全国でもっとも発展している地域。地域福祉サポートちたは、この知多半島のネットワークの「つなぎ役」として活動し、日本地域福祉学会地域福祉優秀実践賞を受賞するほど評価されている。

サポートちたの主な事業は、人材育成・研修事業（ホームヘルパー講座、行動援護従業者養成研修講座）、情報交流促進事業（SUPPORT NEWS（機関紙）啓発・相談（福祉フォーラム、NPOバスツアー）、市民活動支援（市民カフェ ada-coda）などがある。

ヘルパー二級養成講座の修了生の中には、知多半島内のNPOで働くことがあり人材の発掘、各NPOで働く人のキャリアアップにもなる。

サポートちたに求められることは各地域、団体から出された課題を行政、五市五町で共有するアクション。

4. SL活動プログラム

■アンケート

サポートちたのスタッフと関わりがある小中高とその保護者を対象に福祉意識アンケートを実施。

■地域福祉サポートちた

■マスコットキャラクター作り

アンケートの回答者と日本福祉大学社会福祉学部の講義 NPO 論を受講している学生に依頼。地域福祉サポートちたのスタッフに選んでいただいた。マスコットキャラクターの名前は、ちーちゃんとたーくん。



■会員団体 web ページ作り

地域福祉サポートちたの会員団体の中でホームページを持っていない団体（はっぴいわん大府、ネットワーク美浜、孝行の会、あゆみ）の web ページ作成。各団体に取材をさせていただき、地域福祉サポートちたのホームページ内に載せた。

○現場体験

取材をしていくに当たって、現場を知った方がよりよい取材が出来ると提案され「ゆいの会」と「だいこんの花」で現場体験をさせていただいた。ゆいの会では、利用者さんの送迎の付添い、デイサービス、訪問介護を体験。だいこんの花では、デイサービスと訪問介護を体験させていただいた。

■NPO マネジメントセミナー受講

NPO の設立、経営など NPO のマネジメントに関する話を聴いた。講師は、元サポートちた代表であり、サービスラーニングの教員も勤めている松下典子さん。松下さんの他に、NPO 設立中の方々の話も聴くことが出来た。

■SUPPORT NEWS 内サービスラーニングページ作り

地域福祉サポートちたの機関紙、SUPPORTNEWS 内にサービスラーニングのページを作っていただいた。私たちの活動、マスコットキャラクターの紹介、アンケートの結果、など私たちの活動を掲載した。

5. 活動の振り返り 学んだこと

○計画作り

サービスラーニング（以下SL）は、実習と違い活動先にメリットがあり、利用者の・団体のニーズに基づく計画を立てなければならない。

中間支援ということで、高齢者、児童・障害者等明確な利用者がいないため私達に何ができるのか悩んだ。昨年の発表会を思い出しているとイベントをした先輩の姿が目にとまり自分達もイベントをしたいと考えた。そして、最初に立てた計画は、小学生対象のNPOバスツアー、福祉イベント、サポートちた会員団体用SNS。

しかし、サポートちたにこの計画を持っていくと、バスツアーにかかるコストを見せていただき、目的、コスト、サポートちたへのメリット等を聞かれ計画の立て直しをすることになった。グループで話し合うと自分達がやりたいことを計画にしかたけで、サポートちたの理念、目的と外れた計画であったことに気づいた。

もう一度NPOの事前学習を振り返ると、NPOバスツアーで訪問先のことを事前に調べているとホームページがなく情報を得られなかったことを思い出した。そして、サービスラーニングを受講していない学生と話していると、NPOの認知度が低いことを知り、活動計画を立てた。

○活動中

アンケート

アンケートを作成する時、全く知識もなくやみくもにアンケート内容の質問を考えて、それが何のためにするアンケートなのか、誰を対象にしたものなのかをほとんど考えずに作ってしまった。またそれをろくに見直しもせずに対象者にお願いしてしまったので、いざ結果が返ってきたときにどのように役立っていいのかわからなかった。どのような人を対象とするのか何を目的とするのかを考えてアンケートをお願いすべきだった。

アンケートの結果を集計しているとわかったこともある。まず、福祉イベントへの参加意識が薄いこと。自分達が最初に企画した福祉イベントは住民のニーズになかったと知った。そして、小学生と保護者の方は福祉に興味があり、中学生は興味がなく、高校生は半々ということがわかった。

○紹介ページ作り

取材をするに当たって取材先のWEB上での情報を集めることが出来ず、情報の大切さを知った。

代表の話しを聞くだけで終わらず、利用者の方と接する事が出来た。インタビュー

だけでは感じる事の出来なかった、その場の雰囲気や利用者の方同士の関係を知った。

○活動後

現場体験、取材で活動に行った先々で、「あそこの代表本当にいい方」「NPO を立ち上げる前、あの人が勉強した」等他団体の話を自分のことのようにされていました。サポートちたのスタッフは、聞けばどんな団体についても教えてくださいました。つながるといことはまず、相手を知ることだと気づいた。

全ての活動が、つながることの大切さを学ぶことが出来た。

マスコット、アンケートは、私たちだけでは答えていただく人や考えていただく人を見つけられなかった。サポートちたのスタッフを通じて回答していただいた。

NPO マネジメントセミナーでは、参加者、松下さんの NPO 設立までの話の中につながるキーワードがあった。NPO 設立までの備品や人材集めに必要だったのは、つながり。他者とつながることで、助成金や寄付、必要なモノの情報がつながりを通じて入ってくる。

一人では「やってみよう、何とかしたい」と思ってもなかなか出来ない。仲間とつながることでその思いは夢から現実になっていくというつながる大切さを学んだ。

そして、サポートちたは、そんな「やってみよう、何とかしたい」と思っているつながりの輪を広げる、そして別の輪とつなげることが活動で中間支援だと改めてわかった。

○深めていきたいこと

2010年7月末、大阪二児遺棄事件がありました。

起こった原因 色々あるが、アパート住民がお互いを知り、つながっていれば未然に防ぐ事は出来たと思う。近年、つながりが希薄化したために発生した事件がたくさんある。そんな時代だからこそ、「つなぐ つながる つながり」が大切で、福祉職を希望するものとして学んでいきたい。

6、おわりに

最後に、本活動でお世話になりました全ての方々、特に地域福祉サポートちたのスタッフの方にお礼申し上げます。

私たちの不甲斐無さにより予定より多くの時間を費やしてしまい、サポートちたのスタッフの皆様大変迷惑をかけてしまいました。

初めての活動で分からない事だらけの私達でしたが、最後まで見捨てることなく熱心に協力してくださり、心より感謝申し上げます

1. 活動先

特定非営利活動法人

美浜町在宅介護家事援助の会 ふれあいネットワーク美浜

2. 活動メンバー

岡田円 迫田紗希 高橋笑加 長谷幸男

3. 活動先の概要

ふれあいネットワーク美浜の考え方

「地域の誰もが普通に暮らし、すべての人がその存在を認めあい、困った時はお互いさまと助け合える仲間づくりの場、老若男女年齢を問わず語り合える場、子供も障害者も一緒に楽しめる生きがいづくりの場でありたい」

ふれあいネットワーク美浜のあゆみ：1990年12月ふれあいネットワーク美浜設立
地域にあたたかい福祉の手を届ける会として発足、通院介助・家事援助・介護講習を行う。
2001年4月ふれあいハウス美浜（老宅所）開所
2001年9月特定非営利活動法人設立・認証取得
2006年3月福祉有償運送法取得

活動日：月曜日・木曜日・希望の方のみ日曜日

活動内容： 9：00～ お迎え

10：00～ コーヒータイム

10：30～ 病院の送迎、利用者の買い物、昼食用意

12：00～ 昼食、昼寝

13：30～ ハーモニカに合わせて歌を歌う

14：00～ 午後のお茶（紅茶・抹茶・緑茶等）飲みながら
お菓子を食べる

15：00～ お送り

調理コーナーもあり、料理を作ることができる。自由時間は折り紙をされる人やテレビを見る人、新聞を読む人もいる。基本的に利用者のやりたいことをしてゆっくりすごしている。

生活で困ったことがあったら相談にも応じてもらえる

4. SL活動のプログラム

私たちがふれあいネットワーク美浜で行った6日間の活動について報告する。

活動を企画するにあたって注意したことは、ふれあいネットワーク美浜の普段の流れを維持できるようなことだった。その理由は、活動が終わった後に利用者の方がさみしい思いをしないようにするなど日常とギャップを感じさせないようにするためである。

朝は学生1人が全盲の方の病院の送迎についていき、残りの学生は利用者の方と雑談などしながら、午前中を過ごした。昼食前は、学生2人が昼食の準備を手伝い、学生1人がお昼にまた全盲の方の送迎に付き添わせていただいた。昼食は、スタッフの方と学生が作ったご飯を全員そろって食べた。午後は自分達が考えた企画を行った。

1日目は自己紹介をした。まず、学生とスタッフの方と利用者の方が各自プロフィールを画用紙に書いて、その後プロフィールを見せながらみんなで自己紹介した。2日目はたこ焼き作りをした。たこ焼きは、普通のタコ焼きとキムチとチーズを入れたものの2種類を作った。3日目は普段の活動のまま、歌を歌った。歌は、童謡や昔の歌などいろいろ歌った。4日目は歌とちぎり絵をした。ちぎり絵は、ごんぎつねの絵をちぎり絵にした。下書きを私たちが書き、それに従って和紙を張ってもらうという形をとった。歌を歌う時に、楽器ができる学生フルート、ピアノなどの楽器を演奏した。5日目はわらびもち作りとちぎり絵の続きをした。ちぎり絵は利用者の方と一緒にすることができず、自分たちがちぎり絵を完成させ、それを見て楽しんでもらった。6日目はちぎり絵が早く終わったので、クッキーとシャーベットを作った。クッキーはココア味、シャーベットはヨーグルトと桃のシャーベットを作った。そして、この日は活動の最終日だったので、私たちの企画の他にスタッフの方が打ち上げを企画してくれた。スタッフの方の手作りケーキを食べたり、ビンゴをした。利用者の方だけでなく、私達も楽しむことができた。

6日間の活動を通して、一番おやつ作りが利用者の方に喜んでいただけたと感じた。利用者の方は皆おいしいと言って食べてくださった。しかし、ちぎり絵は細かい作業だったので利用者の方に楽しんでもらうことができなかった。

5. 活動のふりかえり

(1)感じたこと・気づいたこと

私たちが活動を通じて感じたこと、気がついたことは、ふれあいネットワーク美浜は利用者の方が10人未満と少人数のNPOであるため、大きな施設とは違うNPO独自の雰囲気がふれあいネットワーク美浜にはあって、居心地が良いということである。それは、利用者に対する会話が「～してください」といった押し付けの感じではなく、日常生活の一部のような何をしようか、といった自然な会話だからだと

考えた。スタッフの気遣いがとてもしっかりしていて、利用者とスタッフは家族のような関係を作っていて、人と人とのつながりが強いことが活動を通して、私たちが会話や企画などを行う中で感じる事ができた。

また、お昼ご飯などの料理は栄養面にも気を遣っていて、利用者はもちろん私たちを含め、どの世代にもおいしいと感じる料理だった。そして、料理からも季節を感じる事ができたことから、日常を感じられると気がついた。

ふれあいネットワーク美浜で気持ちが優しくなれる理由は、居心地がよく本当に自分をだせる場だからだと感じた。それによって、NPO というこのような空間は、利用者にとってもスタッフのいきいきとした様子からも大切であると感じさせられた。

(2)学んだこと

私たちが学んだことは、ふれあいネットワーク美浜は地域の人と関わりの場所であると学んだ。従って、地域の人と関わることができる場所は必要であると思った。しかし、その一方で男性の利用者はいないと言っていいほどほとんどいなく、そのことから男性の地域参加の難しさを感じた。

また、利用者は細かい作業が苦手な方がいたり新しいことが苦手だったり、ちぎり絵などの企画を行うにあたり気を配ることがたくさんあると学んだ。そして、利用をするには利用料もかかるので家族の理解も大切であることを接することで学んだ。会話の面では、スタッフに若い子たちはしゃべり方が早口で分からないと言われ、私たち学生はゆっくり大きい声で話すという話し方や、積極的に自分から行動をしなければいけないことを学んだ。学生は、利用者やスタッフの名前を早く覚えて、名前と呼ぶことが親しくなれるための一歩だととても感じた。そして、利用者一人一人のペースを知っておくことも関わることで大切であると学ぶ事ができた。

全盲の方の送迎について行かせていただいたことで、歩くペースをあわせることやものの形についてなどわかりやすく説明する大切さを学んだ。また、送迎を行う必要さを考えさせられた。

(3)深めていきたいこと

私たち、ふれあいネットワーク美浜で6日間での活動を通して、学んだことや感じたことを生かして今後の学習で深めていかなければならないことは、利用者さんの誰もが喜んでくれる企画を考えるということである。活動を通して、ちぎり絵などの細かい作業はやりたくない方がいた。しかし、たこ焼きやお菓子を作った時は大変喜んでくれたのである。このように、利用者さんが喜んでくれる企画を考えるべきであると思った。その為に私たち自身が身につけていかなければならないスキルは事前訪問

などでの初対面の人とのコミュニケーションの中で相手が何をすれば、楽しいのかということや望んでいることを把握する必要があると考える。その過程において、会話の転換の仕方を工夫することが大切なことであると考えた。また、利用者さんとどこまで関わりを持って良いのかをコミュニケーションを通して考えていきたい。

活動先の方に男性の地域参加が進んでいないということ聞いたのでNPO活動や地域活動に男性も入る為には何をすればいいのかということもグループで考えていき深めていきたいと考えている。

以上のことから、私たちは、グループでコミュニケーションの大切さや男性の地域参加について深めていきたい。

6. おわりに

最後に、私たち学生を温かく活動に迎えて下さり、家族のように接して下さいました「ふれあいネットワーク美浜」の理事長さん、スタッフさん、利用者の皆さんに感謝します。本当にありがとうございました。これからも、よろしく願いいたします。

1. 活動先

特定非営利活動法人 「学童保育ざりがにクラブ」

2. メンバー

本多雄吉、眞野佳奈実

3. 活動先の概要

目的

共働き、母子、父子家庭の子どもたちの放課後及び学校休業日の生活を保障することによって、児童の健やかな発達を援助し、家族の生活や働く権利を守るという学童保育の役割を果たし、また地域の子育て事業及び団体と共同して健全で豊かな地域社会を築くこと。

NPO 法人学童保育ざりがにクラブは、元々1979年から何の補助もなしで個人の家で学童保育を行っていた。その後児童館で行うことを東海市から勧められたが、児童館での学童保育では家庭のようにはないという親たちの想いがあった。そこで、空き地を借りてプレハブを建て、子どもを集めることになった。すべて自分たちでつくったために何度も手直しをしている。そして2003年によりやくNPO法人化された。土地が広くないため、子ども50人が集まるとかなり狭くなる。また、2006年に第2学童「荒尾どんぐりクラブ」を開設。同時に障害児の放課後支援も開始。2009年に阿久比町の学童保育「げんきッズ草木」「げんきッズ東部」を継承受託し、運営を始めた。

ざりがにクラブは、主に3つの事業を行っているNPO法人である。3つの事業とは①学童保育に関する事業②子育て支援に関する事業③障害児の地域活動支援に関する事業である。学童保育は母子家庭・父子家庭・共働きの子どもの放課後・学校休業日の預かりをしている。子育て支援では、半島縦断サイクリングやシアターにこのような親子で参加する行事がある。障害児の地域活動支援は日中一時支援として学童保育と一緒に預かりをしている。

ざりがにクラブの年間行事計画として、4～6月はお花見遠足・潮干狩り・草花あそび、7～8月は夏休みの行事・キャンプ・工作・遊びの教室・他学童交流、9～12月は秋の遠足・サイクリング・ナイトウォーク・記念誌発行・遊びの教室発表、1～3月は正月行事・学童ほいく祭・卒業を祝う会がある。また、放課後学童保育で行うことは、おこづかいデー・ゲームデー・宿題・おやつなど、室内でできることが主であるが、指導員が付き添う・集団で行動することで外あそびもできる。

4. SL活動プログラム

私たちは子どもたちと一緒に夏休みの思い出を作ることを目的として6日間活動をした。

1日目 海水浴

活動初日にざりがにクラブの子どもたちと電車に乗って海に行った。初日ということもあり私たちも子どもたちもお互いに初めて会うということで緊張していた。そんななか指導員の企画で砂浜で宝探しをすることになり、そこで私たちが子どもたちと絶対に関わる機会を作ってもらえたため、早くから馴染めた。

2日目 うどんづくり、流しそうめん

私たちの企画でうどんを作った。夏休みで1日の流れが決まっていたため、他のことをしている子が多く、最初は数人で作っていたが徐々にうどんづくりに興味をもって参加してくれた。

流しそうめんの台は鳴海さん(ざりがにクラブ理事長)に用意してもらい、組み立てはうどんづくりに参加していない子が鳴海さんと一緒に行った。私たちがそうめんやうどんを流し、子どもたちに楽しんでもらった。途中で流し台の位置によって麺がすくえないということでもめた。

3日目 プール

車で知多海浜プールに行った。円形プールと深いプールにわかれているため身長によって泳げる場所が決まっていた友達と一緒に場所に行けない子もいた。休憩中指導員からお小遣いをもらいおやつを買いに行くときその場でいくら掛かるかを計算している子もいたのでお金の使い方が学べるいい勉強になっていたのではないかと思った。

4日目 記念行事のプレゼントづくり

東海市立市民活動センターで記念行事のときに子どもたちに渡すプレゼントのビュンビュンゴマをつくった。子どもたちに渡すものだから色紙の表面にのりがはみ出さないように気をつけた。

5日目 記念行事

ざりがにクラブが設立して30年の記念行事として人形劇を観た。ざりがにクラブ・どんぐりクラブ・げんきッズ草木・げんきッズ東部の子ども約100

人が集まる中で私たちは事前に考えてきたクイズをやり、初めて会う子どもとも関わった。今回は東海市の教育委員会の後援をもらうことができた。

6 日目 まとめ

サービスマーケティング 5 日間の振り返りを鳴海さんと 3 人で行った。5 日間の活動を思い返して反省点や良かった点などを話し合いまとめることができた。また、ざりがにクラブのことも改めて聞いた。

全日子どもたちと戯れた。けんだま検定、マンカラ（ビーだまを使ったボードゲーム）大会、他にもざりがにクラブにあるおもちゃで遊んだり、外に出て遊んだりした。親が迎えにくるまでの時間を決められたことだけではなく子どもたちが自分たちでやりたいことをしているときに一緒に遊んだり、いろいろな話をした。

5. 活動のふりかえり

感じたこと・気づいたこと・学んだこと等

● 私たちについて ●

- ・初日は子どもたちと仲良くなれるのか、不安と緊張でいっぱいだった。いきなり 50 人近くの子どものと関わるのはハードルが高いと思っていた。実際は子どもたちが話しかけてくれたため、比較的早い段階で馴染むことができた。
- ・初日に海水浴ということで名前と顔が一致していない状態だったため、危険を伴う海に行くのはかなり怖かった。遠くに行つてはいけないのに行ってしまう子がいて、追いかけるのが必死だった。
- ・6 日間の活動を通して子どもたちの名前を全員覚えることができなかつたので早く覚えるために子どもたちに名札を付けてもらえばよかつたと思った。そうしたら子どもたちとの関わりがスムーズに行えると感じた。
- ・プールに行ったとき近くにいた子どもが怪我をってしまったのに一緒に遊んでいた子どもに目がいついていて気付かなかつたことがあつたので周りを常に意識して見る必要があることを学んだ。

● ざりがにクラブについて ●

- ・ざりがにクラブがこれから地域の人たちにざりがにクラブのことを知ってもらうために何をしていかないといけないのか学んだ。その中に記念行事で見た人形劇をまた行い一般の人を招くことがある。
- ・子どもたちとの接し方では例えば話すときにアニメやマンガ、ゲームと言つた子どもたちが好きそうな内容を出すと喜んでくれることを学んだ。そのためには、アニ

メやマンガ、ゲームのことを知っておく必要があるので調べたりした。

- ・1日の流れはゲームできる時間、遊べる時間、勉強する時間などが設けてあり1日のメリハリをつけていることがわかった。
- ・建物がとても狭いので長期休みなどで50人もの子どもたちが集まると遊ぶときにとっても窮屈なのではないかと感じた。

●子どもたちについて●

- ・障害を持った子がいて低学年の子どもたちはゲームなどを一緒にして普通に遊んでいたが中高学年の子どもたちは障害を持った子が遊ぼうとしていても避けているように感じた。

●企画について●

- ・うどんづくりでは宿題など他のことをやる時間だったためうどんをつくろうと誘っても興味を持って参加してくれる子が少なかった。しかし、うどんづくりをしていると興味を持ってくれる子が出てきて手伝ってくれたので無理に誘うより待つことによって興味を思ってもらう時間をつくることも大切だと思った。
- ・流しそうめんをしたときにそうめんを流すところから近い子どもたちと遠い子どもたちでは食べられる量が変わってきてしまうので前の方の子どもたちと後ろの方の子どもたちの場所を変えたり、制限時間を設けてみんなが平等に食べられるようにする必要があると学んだ。

6. おわりに

6日間サービスラーニング活動をさせていただいた NPO 法人学童保育ざりがにクラブの理事長さんの鳴海さん、指導員の方々本当にありがとうございました。鳴海さんや指導員の方々のお陰で無事6日間を終えることができました。

私たちは子どもとの関わり方、ざりがにクラブがどのようなNPO法人なのかなどを学ぶことができました。最初はなにもわからない私たちでしたが、6日間活動させていただいたことでざりがにクラブの子どもだけではなく他の学童の子どもたちとも関わり、活動前とは違う関わり方が学べました。

この6日間で学んだり、考えたことをこれからの学習や生活に活かしていきたいと思います。最後に本当にお世話になりました、ありがとうございます。

1. 活動先

特定非営利活動法人 「もやい」

2. メンバー

大内伽耶 北村江美莉 米山沙希

3. 活動先紹介

もやいは、阿久比町にある農家を改装して作った事務所で、個性豊かで明るく元気なスタッフさんによって運営されているアットホームな NPO である。

助け合いの輪を広げ、やがて迎える老いを豊かなものにし、誰もが安心して子どもを生み育てられる地域づくりを目指し、必要なときに必要な支援を心掛けている。地域の安全装置でありつづけること、存続を未来への贈り物とすること、地域の寄り合い所であることをモットーとして、地域の方々の暮らしの小さなお手伝いをし続けていくことを理念とし、活動している。

ここでもやいの事業内容について紹介する。

介護保険事業

介護保険が適用する方を対象とした、身体介護、生活援助を行っている。

障害者福祉サービス事業

障害者を対象とした身体介護、家事援助、通院介助などを行っている。

移送支援事業

病院の送り迎えなどの有償運送を行っている。

ミニデイサービス

介護保険を利用しない、誰でも利用できるデイサービスで、昼食・昼寝・おしゃべり・ゲームなど、寄り合い所としての事業を行っている。

子育て支援事業

産前産後の家事援助、保育園の送り迎えなどを行っている。

在宅支援事業

掃除、食事作り、簡単な身体介助などを行っている。

研修・啓発・相談活動

研修生の受け入れやボランティアの受け入れを行っている。

地域交流活動

ふれあい講座として絵手紙やガーゼ染めを教えたり、昼食会を開いたりしている。

その他にも高齢者による子育て・親育て事業として牛小屋を改装した「もーちゃんハ

ウス」でお菓子作りやものづくりの体験講座を行っている。

4. SL活動プログラム

私たちが行ってきた主な活動を5つ紹介する。

夜空を見上げる会

昼に流しそうめんの手伝いやかき氷作り、ヨーヨー釣りなどを企画し、夕方にはもやいのスタッフさんやヘルパーさんたちとバーベキューをした。また夜には、半田の空の科学館のふくろうの会の方にボランティアを依頼し、大きな望遠鏡を持ってきていただいて、天体観測をした。参加者のみなさんが目を輝かせて説明を聞いている姿が印象に残った。雲が多くてあまり見えなかったが、参加者してくださった方々の楽しそうな姿が見られてうれしかった。

訪問介護

ヘルパーさんに同行して、訪問介護の現場を見せていただいた。利用者さんとお話をしたり、少しだけだが実際に介助のお手伝いもさせていただいたりした。介護がいかに大変なものかということ、身をもって体験してきた。

ミニデイサービス

もやいの特色の一つである誰でも利用できるデイサービスで、昼食作りを手伝ったり、利用者さんと一緒に体操をしたり歌を歌ったりした。みんなでご飯を食べたり話をしたりと、利用者さんがもやいで過ごす時間を楽しんでいるように感じた。

子育て・親育て事業

もやいのヘルパーさんや地域の高齢者の方を講師としたマジック教室やケーキ作りなどのお手伝いをした。子どもからお年寄りまでさまざまな世代の人が参加していて、遊びは全世代共通であることを学んだ。

ガーゼ染め

輪ゴムで縛ったり割り箸に挟んだりしたガーゼを、染料につけて干して色止めをしてという作業を体験させていただいた。出来上がりを想像しながらガーゼを縛っても、実際に染めてみたら全く違う柄になっていて、予想外の出来上がりに面白さを感じた。また、もやいではこのガーゼを商品にして売っているという話を聞いて、1つの製品を作るためにはさまざまな過程が必要だということも学んだ。

またこの他にも、防災教室のお手伝いや、通院介助などもやいで行っているさまざまな事業に携わらせていただいた。

4. 活動のふりかえり

感じたこと、気付いたこと

まず、自分たちの計画内容の薄さに気がついた。夜空を見上げる会の日のかき氷やバーベキューなど、自分たちで考えた企画をやらせていただいたが、準備や練習がしっかりできておらずスタッフの方々に迷惑をかけてしまった点がいくつかあった。段取りを固めておかないと色んな人に迷惑がかかるし、計画を具体的にしておけば誰もが動きやすくなるということがわかった。

また、周りを見ることの大切さに気付いたとともに、自分にできることを考え行動することの難しさを感じた。活動の中で時間が空いたときに、何をしたらよいかわからずスタッフさんの後について行ったり、スタッフさんの事務作業を見ていたり、何もしていない時間が出来てしまった。スタッフさんが次々にやることを見つけて作業しているのを見て、周りに注意を向けて行動していくことの大切さに気付いた。

6日間の活動を通して、現場で支援している方のあつい思いに触れて感じることできた気持ち、コミュニケーションを取る中で伝わらなくて悔しかった気持ち、支援現場を見て何もできない自分へのもどかしい気持ちを実際に現場で活動することによって感じることもできた。

学んだこと

ミニデイサービスなどの事業だけを行っているとしても赤字になってしまうため、ガーゼ染めなどの体験講座を開いて出来上がったものを商品にして活動資金の一部を集めているという話を聞いて、活動の一つ一つがすべて NPO の運営に繋がっているということを学んだ。

また、高齢者による子育て親育て事業の体験講座で子どもと接したときに、子どもが大人にお礼を言えない、話が聞けないという状況を目にした。そして、親が子どもを預けるときに親から一言も挨拶がないという話を聞いた。こういったことから、子どもの教育には親の教育も必要で、地域が子どもや親たちに働きかけていくことの必要性を学んだ。

そして、活動の中で利用者さんと接する機会がたくさんあったにもかかわらず、利用者さんがどのような人なのか、どんな問題を抱えておられるのかがしっかりとわかっておらず、どのように接したらよいかわからない場面がたくさんあった。利用者さんと信頼関係を築いていくには、利用者さんのことを知る必要があり、そのための知識や一人一人とじっくり関わっていく気力、相手の気持ちを考え思いやることのできないと、誰かを支援する活動は成り立たないということを学んだ。

深めていきたいこと

活動の中で、いつも決まった子どもたちが利用しているということに気づき、NPOはいったいどれくらい地域で浸透しているのか疑問に思った。また、子どもや親への教育を地域が何らかの形で働きかけていくことの必要性を学んだ上で、子どもたちやその親に私たちの言葉はどうすれば伝わるのかということや、利用者の方々と接する中で大切にしていかなければならない点など、深めていきたいことを見つけることが出来た。地域と密着する中で、一人一人の利用者さんと接するときに、いつまでも思いやりの気持ちを持ち続けるためにこれからも学びながら深めていきたいと感じた。

5. おわりに

活動を通して、座って講義を聞いているだけでは学ぶことのできないことを実際に目で見て学ぶことができました。もやいのスタッフの皆様や私たちの活動に携わってくださった方々に感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。